

東海の結物製作の曙

—豊田市古城遺跡出土の事例から—

● 鈴木正貴

15世紀前葉に位置づけられる豊田市古城遺跡 SE01 の井戸側に利用されていた結物筒の資料紹介をして、15世紀後半以降の井戸側に利用されていた結物筒と比較・検討した。この結果、古城遺跡 SE01 の結物筒は15世紀後半以降のものと同製作技法が異なることが明らかとなり、結物が本格的に普及する以前の結物のあり方を知る貴重な資料であることを示した。

1 はじめに

本稿では、豊田市古城遺跡で発見された井戸 SE01 の井戸側構造物について資料紹介し、そこから木製結物製品の普及に関して若干の検討を加えるものである。

これまでの考古学的な木製結物製品に関しては、三浦純夫（三浦 1988）、鈴木康之（鈴木 1995）、石村真一（石村 1997）などの研究があり、これらの成果をもとに筆者は考古学的な資料から結物の歴史を概観したことがある（鈴木 2000a）。この考察では、日本における結物の様相を、結物Ⅰ期（結物導入期：11世紀後半～13世紀）、結物Ⅱ期（結物普及期：14世紀）、結物Ⅲ期（結物確立期：15世紀～16世紀）、結物Ⅳ期（結物展開期：17世紀以降）の4期に区分して、結物の普及のあり方を考究した。そして、結物Ⅱ期では、結物が井戸側に使用される事例は少なく、その少ない事例はヤリガンナや横挽き鋸など従来の道具を用いて製作されたとした。一方、結物Ⅲ期では、井戸側における結物の使用例が急増し、側板側面の加工に台鉋などの工具が導入されるなど、後に展開する結物生産技術が確立した段階と位置づけた。その後、鈴木康之は草戸千軒町遺跡出土事例を中心に13～14世紀の結桶受容の背景や技術者の問題などを論じた（鈴木康 2002）。

上記の研究の結果、結物Ⅱ期から結物Ⅲ期に至る過程で結物の製作技法と利用状況が大きく

変貌することが明らかになりつつある。実際には、結物Ⅲ期の始まりは15世紀半ば頃のことと筆者は考えているが、結物Ⅱ期の様相に不明な点が多いため、その年代など画期の様相を具体的に明らかにすることが困難な状態である。それは14世紀から15世紀中頃までの遺跡の様相を把握しにくく、結果としてその時期の木製遺物の資料が少ないことが最大の原因となっているためである。

このような状況は、東海地方においても同様に当てはまる。東海地方で15世紀中頃以前の結物の存否と、存在した場合のその形状と製作技法が問題として残っており、新資料の発見が待たれているところである。

2 古城遺跡事例の紹介

(1) 遺跡の紹介

古城遺跡は、愛知県豊田市御立町2丁目60番地に所在する。豊田市街地東部の矢作川左岸に形成された沖積低地に立地し（図1）、低地から続く周辺の段丘上には縄文時代から近世に至るまでの遺跡が点在する。発掘調査の結果、遺跡は黄褐色粘土からなる南北に伸びる中州状の台地に存在することが明らかとなった。

古城遺跡は平成12年度に豊田市教育委員会によって5300㎡の発掘調査が行われた。その結果、古代から近世までの遺構や遺物が確認され、建物跡と土坑群が展開する集落遺跡である

ことが判明した。特に13世紀から15世紀の間の遺物が多数出土しており、この段階には掘立柱建物跡と井戸に加え、方形堅穴状遺構などの遺構が展開していた。倉庫や作業場などが想定される方形堅穴状遺構があることから職能民の存在が予測され、中世後期になると古城遺跡は川港に伴って新たな都市的な場として位置づけられるようになったと報告書で論じられている。

(2) 結物出土遺構の紹介

ここで取り上げる古城遺跡 SE01 は調査区北西部で検出された井戸である(図2)。井戸の掘方は平面形が直径約2.2mの円形で、深さは約3.6mを測る。遺構検出面から約70cm下で一辺約91cmの方形縦板組の井戸側が1段残存し、その下位には直径約90cmの円形結物筒の井戸側が1段存在する。上位は方形縦板側横棧支柱式、下位は円形結物側式が組み合わさった井戸側構造と表現されよう(鈴木正2002)。

上位の方形縦板組では、横棧は4段残存し各段とも目違い柄組が施されている。支柱は三角柱材が用いられていた。縦板は残存する長さが141cm～185cm、幅が10cm～27cm、厚さが1.5cm～5.0cmに分布し、各辺とも4～5枚が使用されていた。縦板の内側には幅は5cm～11cmの添板も入れられていた。最下段の横棧底面から下位の井戸側である結物筒が設置され、結果として縦板と結物筒は約15cm重なっている状態である。結物筒の外側四方には扁平な川原石が数個重ねて配置され側板を支えていたという。底面には小砂利が敷き詰められており、これらは湧き水を浄化させる機能を果たしていた可能性が考えられよう。なお、結物筒を水溜部とする見方もできるが、ここでは上位と下位の構造物の規模があまり相違しないことなどから、結物筒も井戸側部の一部と理解しておきたい。

井戸構築材の樹種は、上位井戸側の縦板と添板および支柱はヒノキとネズコが用いられ、横

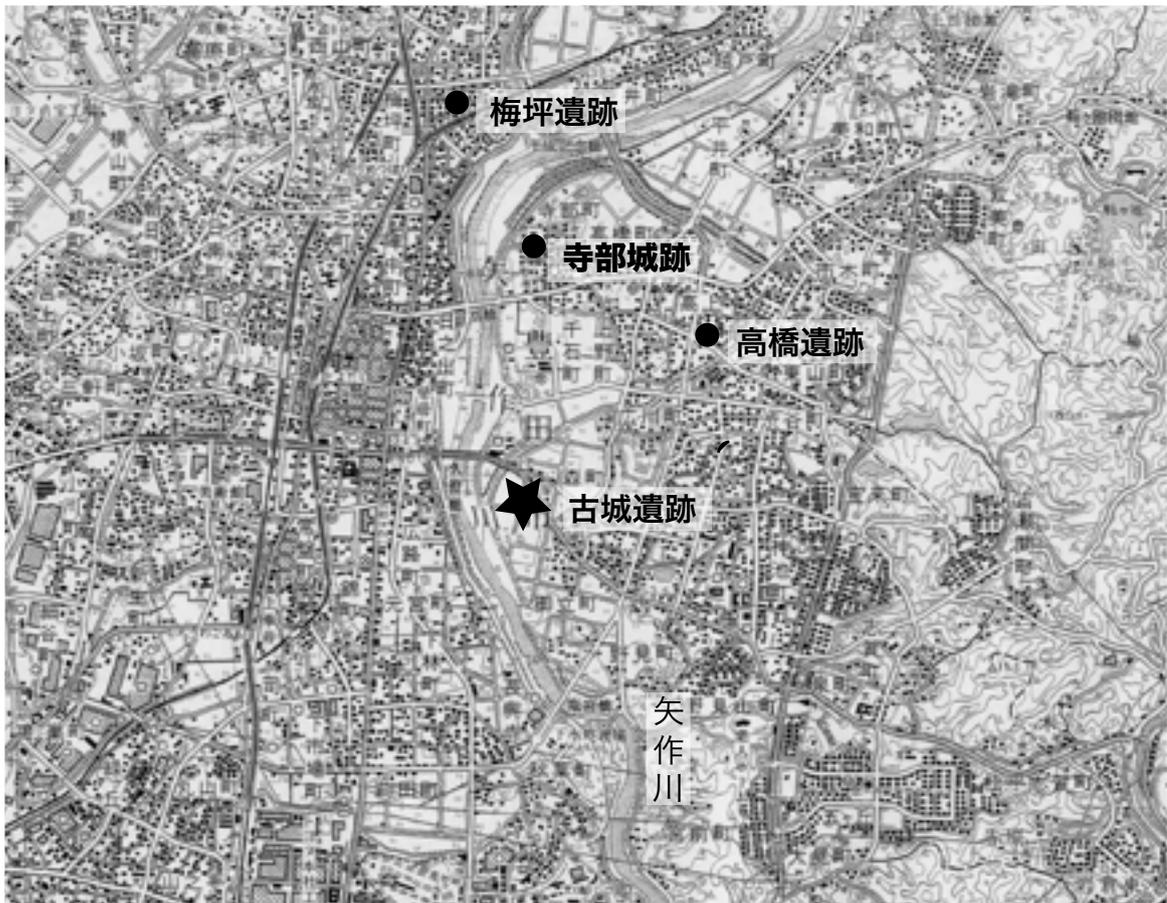


図1 遺跡位置図(国土地理院作成1:50000地図「豊田」を一部改変した)

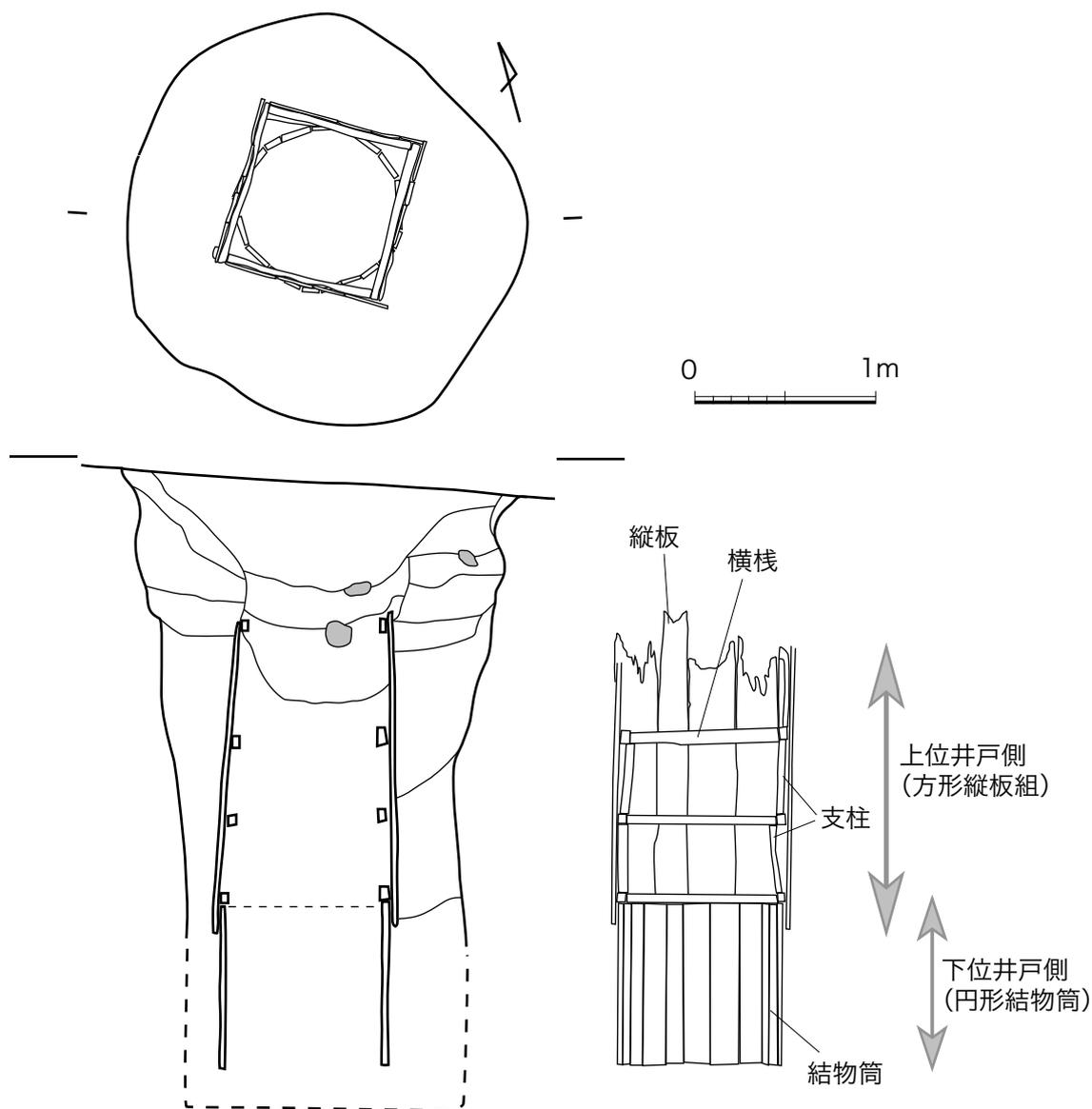


図2 古城遺跡 SE01 (山本編 2004 所収図を合成改変した)

棧はヒノキが主体を占め他にコウヤマキとマキ属が利用されていた。一方、下位井戸側の結物筒側板はヒノキとネズゴが用いられていた(植田 2004)。

この井戸 SE01 からは土師器皿 1265 点、山茶碗 481 点、古瀬戸製品 38 点などが出土した。尾張型山茶碗類は藤澤編年の第 9 型式まで、東濃型山茶碗類は脇ノ鳥窯式期まで、古瀬戸製品は中期後半から後期まで存在するという。大半の遺物が井戸を最終的に埋める際に一緒に埋められたという所見があり、報告書では 14 世紀後半～ 15 世紀後半に位置づけられていた。ま

た、鈴木とよ江は古城遺跡出土土師器皿を西三河の土師器皿編年の中に位置づける検討を行った結果、井戸 SE01 は 15 世紀前葉に属するのではないかと想定した(鈴木 2005)。

(3) 結物の紹介

SE01 の井戸側下位に使用された結物筒は、検出段階でおおよそ直径約 90cm の円筒形である(図 3)。側板の長さは 88.5cm～90.0cm、幅は 10.0cm～17.5cm、厚さは 2.5cm～3.0cm であり、21 枚で構成されていたという。籠は 3 段残存していた。

今回、豊田市教育委員会のご好意によりこの結物筒を実見する機会を得た。SE01 出土木製井戸側の材は遺存状況が極めて良好であり、自然乾燥の状態 で保管されていた。井戸側下位の結物筒は 21 枚の側板で構成されているが、改めて各側板の法量を乾燥状態で計測すると、最大長 88.5cm ~ 90.0cm、最大幅 (≒下端幅) は 8.7cm ~ 17.6cm、最小幅 (≒上端幅) は 7.3cm ~ 17.0cm、最大厚は 2.4cm ~ 3.5cm を測る。一般に井戸側に使用される結物筒の側板は下端幅が上端幅より広いが、SE01 の場合は上端幅が下端幅より広いものが 5 枚存在しており、均一な仕上がりにはなっていないことが判明した。下端は長辺に対してわずかに斜めに切断されたものが多い。また、16 世紀以降の井戸側の最下段に用いられた結物筒は、下端の内側を浅く削ることにより縦断面形で尖らせた形状となるのが通例であるが、SE01 の場合は最下段の井戸側にも関わらず先端を尖らせてい

ない。

側板の製材技法は楔を用いて打ち割る割裂法が用いられたとみられ、表面の一部がヤリガンナなどの工具で削り整形されている。ヤリガンナなどによる切削痕が認められない部分では割裂法による破割りした際に生じる「ささくれ」が残存する状態のものが多い。材はところどころ節を持つものがあり、このためうまく製材できなかった部分が削られる場合もある。側板の外表面は、チョウナなどの工具による切削痕が部分的に残存する。破割りした材の状態にもよるが、概ね材の側面に近い部分を削り取る場合が多く、結果として外面は曲面を形成している (図 4-1)。一方、内面も外面と同様に、割裂法による製材の後にチョウナなどの工具による整形痕が部分的に残存する。ただし、材中央を削って結果として曲面を形成することはなく、側板内面は比較的平坦な面となっている (図 4-2)。この結果、側板の横断面は逆台形の上辺が弧状



図 3 SE01 出土結物筒



図 4-1
古城遺跡 SE01
下位井戸側
側板 No.2
外面



図 4-2
古城遺跡 SE01
下位井戸側
側板 No.2
内面



図 4-3
古城遺跡 SE01
下位井戸側
側板 No.2
上端面



図 4-4
朝日西遺跡
58区 SE04
上から2段目
井戸側側板
上面

に盛り上がった形状となっている（図4-3）。

側板側面は比較的平滑に仕上げられており、その調整技法を特定することは難しいがわずかな凹凸が認められることからおそらくヤリガンナ等の工具で削り整形されていると思われる。側面は、側板を結び合わせる際にスムーズに円筒形に組み合わさるように内側に向かって傾斜面が付けられていた。単純に板材を集め結び合わせたものではなく、結物の側板として意識して作られていると評価できる。

3 考察

井戸側に使用された結物筒（井戸結桶）について、筆者は以前に大きく4類に区分したことがある（鈴木2000b）。井戸結桶（結物筒）Ⅰ類は中国から輸入されたものと推定される結物筒で、良好な資料を実見することができず詳細な調整痕などの実態は不明である。鈴木康之は宋から渡来した技術者によるものと評価しているものである（鈴木康2002）。井戸結桶（結物筒）Ⅱ類は割裂法によって製材され側板側面がヤリガンナで調整された結物筒である。井戸結桶（結物筒）Ⅲ類は割裂法によって製材され側板側面が台鉋状の工具で調整された結物筒である。井戸結桶（結物筒）Ⅳ類は縦挽き鋸によって製材され、側板側面が台鉋状の工具で調整された結物筒である。各類は結物の様相の時期区分とおおよそ対応しており、井戸結桶（結物筒）Ⅰ類は結物Ⅰ期、井戸結桶（結物筒）Ⅱ類は結物Ⅱ期、井戸結桶（結物筒）Ⅲ類は結物Ⅲ期以降、井戸結桶（結物筒）Ⅳ類は19世紀以降に認められるとした。

今回取り上げた古城遺跡 SE01 の結物筒は側板側面がヤリガンナで調整されたものと推定され、井戸結桶（結物筒）Ⅱ類に該当する。SE01 の年代は、井戸側内から出土した土器類の検討から15世紀前葉に属すると推定されており、結物Ⅲ期の始まりを15世紀半ば頃とすれば結物Ⅱ期の資料と位置づけられよう。

ところで、古城遺跡 SE01 の結物筒は結物としては異例な形状を呈していた。それは、側板内面を比較的平坦な面に作るため側板の横断面は逆台形の上辺が弧状に盛り上がった形状とな

っている点である。これは15世紀後葉以降の井戸側に使用された結物筒には見られない特徴である。例えば清須城下町の一部である朝日西遺跡で検出された58区 SE04 の事例と比較してみる（鈴木1988）。

58区 SE04 の井戸側に使用された結物筒の側板製材技法は楔を用いて打ち割る割裂法が用いられたと思われる。側板の外側は、割裂法による製材の後にチョウナなどの工具による切削痕が部分的に残存し外側は曲面を形成している点は古城遺跡 SE01 とあまり変わらない。一方、内側は、割裂法による製材の後にヤリガンナなどの工具で内側を抉るように削られている。この結果、側板の横断面は円弧状となっている（図4-4）。このようにみると、朝日西遺跡58区 SE04 は側板を結び合わせた際に内外面ともにスムーズに円筒形の曲面を形成するように意識して作られていたと評価できる。一方、古城遺跡 SE01 の場合は内面が多角柱状のままであるといえよう。

では、結物Ⅱ期以前（15世紀中頃以前）の他の井戸側に使用された結物筒はどのような形状であろうか。結物Ⅱ期以前の井戸に使用された結物筒が良好な形で残存し実見できる資料はあまり多くはない。筆者がこれまで実見できたのは三重県宮ノ腰遺跡例（水谷編1999）と福岡県大宰府遺跡例のみである。詳細な観察記録をここでは割愛するが、この両者とも側板内面を平坦に作り側板の横断面は逆台形の上辺が弧状に盛り上がった形状となっていたことを確認している。また、両者とも側板側面がヤリガンナで調整されていた。

このように、少ない事例をながらも井戸結桶（結物筒）Ⅱ類の特徴として、側板側面がヤリガンナで調整されたこと以外に、側板内面を平坦に作り側板の横断面は逆台形の上辺が弧状に盛り上がった形状となる特徴を加えてもよいと考えられる。ところで、このような特徴は何を意味しているのだろうか。それは、井戸結桶（結物筒）Ⅱ類は内側が結果として多角柱状であり正円形を呈しておらず、底板や蓋板がはめ込まれることを想定していないもの、すなわち水を漏らさない容器としては作られていない可能性が高いということである。実際に、井戸結

桶（結物筒）Ⅱ類は、筆者が実見した全ての事例において底板や蓋板の圧痕が認められない。当初から井戸側としての結物筒を意図して製作されたものであると評価できよう。そして、内面を円筒形に作り出そうとする意図の有無に、井戸結桶（結物筒）Ⅱ類と井戸結桶（結物筒）Ⅲ類の間、すなわち結物Ⅱ期とⅢ期の画期に技術的な断絶を見出すことができるのではないかと考えている。

4 まとめ

以上の検討の結果、古城遺跡 SE01 例は類例の少ない結物Ⅱ期以前の井戸結桶（結物筒）Ⅱ類の好事例として位置づけられ、井戸結桶（結物筒）Ⅱ類とⅢ類の相違点をより一層明確にす

ることもできた。そして、この井戸が15世紀前葉に属することからみて、これまで曖昧に評価してきた井戸結桶（結物筒）Ⅲ類の出現の画期（すなわち結物Ⅱ期とⅢ期の画期）を、15世紀中頃に限定していくことができる可能性が出てきた。この画期は、東海地方で見られる遺構や遺物の様々な面で認められる画期とほぼ同時期であり、井戸側構造の製作技法の面においても物質文化の大きな転換点に連動して変化した結果と評価できるかもしれない。

最後に、古城遺跡の資料紹介を許可いただいた豊田市教育委員会をはじめ、下記の多くの方々にご教示を賜りご便宜を図っていただいた。記して感謝します。

杉浦裕幸、鈴木とよ江、水谷豊、森泰通、山本ひろみ、横田賢次郎（敬称略）

引用・参考文献

- 石村真一 1997 『ものと人間の文化史 82 桶・樽』法政大学出版局。
- 植田弥生 2004 「古城遺跡出土井戸構築材の樹種同定」『古城遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第23集。
- 鈴木正貴 1988 「清洲城下町遺跡出土の井戸桶に関する考察」『年報昭和63年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター。
- 鈴木正貴 2000a 「出土遺物からみた結物」『桶と樽 脇役の日本史』法政大学出版局。
- 鈴木正貴 2000b 「井戸桶と早桶」『桶と樽 脇役の日本史』法政大学出版局。
- 鈴木正貴 2002 「中世井戸についての若干の考察—愛知県下の事例を中心として—」『東海の中世集落を考える資料集』第9回東海考古学フォーラム。
- 鈴木とよ江 2005 「中世遺跡の空白期をめぐって—豊田市古城遺跡の再評価—」『三河考古第18号』。
- 鈴木康之 1995 「草戸千軒町遺跡出土の桶・樽について」『草戸千軒 No.229』。
- 鈴木康之 2002 「日本中世における桶・樽の展開—結物の出現と拡散を中心に—」『考古学研究』第48巻第4号。
- 三浦純夫 1988 「結桶の出現と普及」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズ刊行会。
- 水谷豊編 1999 『宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター。
- 山本ひろみ編 2004 『古城遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第23集。